

最も小さい者と共に

在日大韓基督教会浪速教会「愛の家」主任牧師
金 鐘賢

そこで、王は答える。

「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も
小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたこと
なのである。」

(マタイによる福音書 25 章 40 節)

本日、同志社大学京田辺キャンパスのチャペルにお招きいただき、敬愛する先生方、教職員の皆さま、そして学生の皆さんと共に神様の御言葉を分かち合うことができることを、大変光栄に思います。

私は大阪の在日大韓基督教会浪速教会「愛の家」に仕える牧師です。今年、私たちの教会は創立 29 周年を迎えます。私たちの教会は、最初から教会として始まったものではありません。日本社会の中で見捨てられ、居場所を失った人々と共に生きる共同体「愛の家」から始まりました。

現在も炊き出し、伝道集会を行いながら、福祉住宅を運営し、そこに共に暮らす方々を総合的に支え、共に生きる働きを続けています。

2013 年 2 月 25 日には、私と「愛の家」の活動が朝日新聞社会面の全面記事として掲載されました。そのため、一時的に私は有名人のようになりました。そして、そのことによって私たちの活動が多くの人々に知られるようになりました。

記事の主人公は、知的障がいを持つ濱崎真さんという方でした。彼は私たちの福祉住宅で暮らしていましたが、誰かとけんかをしたり、不満や怒りが募ったりすると、突然家を飛び出してしまうことがありました。

すると必ず警察から連絡が入り、私たちは彼を探しに行って家へ連れ戻しました。放浪から帰って来るたびに、ズボンに便や尿を漏らした状態でした。私たちは彼を温かく迎え入れ、体を洗い、着替えをさせました。

すると濱崎さんは「私が悪かったです」

と謝るのです。

教会のスタッフが数えてみたところ、その回数は 70 回を超えていたそうです。そして彼は申し訳ない気持ちから、アルミ缶を集めて持って来てくれました。

朝日新聞の藤生明(ふじうあきら)記者が私たち「愛の家」の活動を大きく報道したのは、私たちが特別に大きな事業をしていたからではありません。最も小さな一人の人を見捨てず、最後まで愛し続ける姿を、多くの人に伝えたいと思われたからだと思います。

後で聞いた話ですが、藤生記者は私たちの記事を掲載しようとしたのですが、四回以上も編集部で断られたそうです。しかしその熱意によって、2013 年 2 月 25 日、ちょうど韓国^{パク・クネ}の朴槿恵大統領就任の日に、大統領就任の記事よりも大きく私たちの活動が報道されました。

しかし私は、何か特別なことをしたとは思っていません。困難の中にいる人、自分の力だけでは生きていけない人を支えることは、私たちの日常だからです。神様がそうせずにはられない愛と憐れみの心を与えてくださったので、そのようにしてきてだけです。

もし私が助けるべき人を助けず、そのまま放置していたならば、むしろ私自身が苦しくて耐えられなかったと思います。

今日の聖書で、イエス様は最も小さい者に善を行った人々にこう語られます。

「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」

私たちはどのようにして最も小さい者と共に生きることができるのでしょうか。

それは、イエス様が私たちに愛の心、憐れみの心を与えてくださることによってです。罪人を救うために命を捨てられた主の愛が、皆さんの心にも豊かに注がれることを願っています。

その時、私たちは隣人を自分自身のように愛し、苦しむ人の苦しみを自分の苦しみとして受け止め、共に生きることができるのです。

イエス様はここで、最も小さい者のご自身を重ね合わせておられます。言い換えれば、飢えている人が空腹に苦しむとき、主もまた共に空腹を感じておられるのです。病んでいる人が苦しむとき、主も共に痛んでおられます。旅人が孤独の中で涙を流すとき、主もまた悲しんでおられます。

イエス様は最も小さい者のご自身を一つにしておられるのです。

そのためイエス様は、最も小さい者に善を行った人々に向かって、「その人にしたことは、わたしにしてくれたことなのだ」と語られるのです。

では、私たちはどのようにして最も小さい者と共に生きることができるのでしょうか。

私は長年にわたり、ホームレスの方々に少しでも食事を届けようと、毎日のように食べ物を運んできました。

その中に、家里さんという方がおられました。精神障がいを抱え、一人で話し続けたり、突然怒り出したりする方でした。彼は私の家の近くで 20 年以上暮らしていました。

私は家里さんと対話を重ね、やがて友人になりました。毎日食事を届け、誕生日にはお金やプレゼントを渡しました。もし渡し忘れたことに夜中に気付くと、寢床から起きて食べ物を届けに行くこともありました。

なぜそのようなことができたのでしょうか。

それは、家里さんがいつの間にか私の友人となり、兄弟となり、家族となっていたからです。私が共に生き、支えるべき家族になっていたのです。

愛する皆さん。私たちの社会や地域には、ホームレスの方々、障がいを持つ方々、外国にルーツを持つ方々など、誰かの助けを必要としている人々がいます。現在、日本社会では、障がいを持つ人、外国人、ホームレスの方々を差別、嫌悪、蔑視の目線で見ている人が多くいます。

しかし私たちは、別のまなざし、すなわちイエス様のまなざしで「最も小さい者」を見なければなりません。私はこう考えています。私の家や教会の近くにホームレスの方や困窮している人がいるのは、その人は私が助け、共に生きるべき兄弟姉妹であり、家族であると思います。

さらに今日の御言葉でイエス様は、「最も小さい者とわたしは一つである」と言われます。そして、その人々の苦しみも喜びも共に担っておられます。

この場におられる皆さん一人ひとりが、「最も小さい者」を他人としてではなく、自分と共に生きるべき家族、隣人、兄弟姉妹として受け入れ、共に歩んでくださることを心から願っています。

ありがとうございました。